1456

163
432

山田寅之助著

碁稽教の心髓

東京
教文館發行

4318
9711

山田寅之助著

基督教の心髓

東京
教文館發行

自序

基督教は一方より見れば中々深遠の教ですが、他方より見れば愚夫愚婦にも知れ易き平易の教である、高尚な教は智者や學者には餘程面白きものですが、凡人には一切味のないものです、基督教は人間の智識上の快樂の爲に存するものではなく、人間の道德を修養し、其精神を潔むる爲の目的であれば、高尚めかしたとて何の益もないものです、基督教を說く人も矢鱈に高尚めかして說き、又知つても知らなくつても、痛痒を感ぜぬ所を繰返して說きますが、人の德を進つるに於ては迂遠極まるものです、一見して基督教はどんなものかを知る事の出來る書物とては世間に餘りない、人に就て質問すれば迂遠に說て、中々要領を得ない、私は直ちに基督教の道德のどんなものの乎を人に知らせ易い書の必要を感じて、この一小冊子を著した譯です、實に平々凡々の書であつて、

自序

基督教を既に信じなされた方々には御覽に入れるも恥しい次第であります、しかし恥しいとは不道理で恥しいのではない、説きやうの平々凡々たる事が恥しいのです、故に私は求道者丈けに本書の一讀を御勸め申します、何程平易でも基督教の心髓を知るに用が足れますから、この小冊子を見て輕蔑せぬやうに願ひます、寧ろ御愛顧を乞ふのです、

明治廿八年九月

著者誌

目次

基督教の心髓

目次

第一章　最大の誡……一頁
神人の關係……一
(一)神は人間の創造者……三
(二)神は人間の保護者……四
(三)神は人間の主君……六
神に對する愛の意義……八
(一)神を尊敬する事……一〇
(二)神の心を悅ばす事……一二
(三)神の誡を守る事……一三
(四)神の榮を現はす事……一五

天倫と人倫との關係……一七
第二章　第二の誡……二〇
自愛……二四
他愛……二七
隣とは何人を云ふや……三一
愛敵の教……三三
第三章　愛の諸態　其一……三六
(一)愛は妬まず……三八
(二)愛は誇らず驕傲らず……四一
(三)愛は非禮を行はず……四四
(四)愛は己れの利を求めず……四五
(五)愛は輕々しく怒らず……四五

(六)愛は人の惡を念はず……四八
(七)愛は不義を喜ばず……四九
第四章　愛の諸態　其二……五二
(一)愛は寛忍をなす……五二
(二)愛は人の益を圖る……五三
(三)愛は眞理を喜ぶ……五五
(四)愛は何事も包容む……五八
(五)愛は何事も信ず……六〇
(六)愛は何事も望む……六一
(七)愛は何事も忍ぶ……六三
第五章　愛の作用……六六
(一)愛は知力なり……六六

目次終

(二)愛は安心立命の基……七〇
(三)愛は感化力なり……七四

基督教の心髄

山田寅之助著

第一章　最大の誡

「耶蘇答へて曰ふ、是れ第一にして大なる誡なり」（馬太傳廿二章卅七、卅八）

最大の誡は爾心を盡し精神を盡し意を盡し主なる爾の神を愛すべし

孔子の教には五倫五常をば甚だ精密に説示して居るが、神に對する道即ち天倫の事に至て、甚だ漠然として居るが爲に、宗教の要素を欠て居る、佛教には基督教の如き神なきのみならず、儒教の如き神すらもなきが故に、從て天倫のなきも當然の事である、又古來世間には聖人賢人が出て、いろ〳〵と神を説示したるも、其神の性質曖昧にして、之に對す

るの道も判然と知れぬ、基督の世に生れ給ふに及んで、今まで雲に隔てられたる月の、雲間よりもれいでたる如く、神の性質、之に對するの道は明かに人間界に知れ、宮に天倫の知れたるのみならず、今日まで有り來りの人倫までも、之が爲に一層明かになりました、この點より申せば、基督は倫理界の大改革者であります、今まで眞正の天倫の何たるを知らざるの人々は、基督の教を色々非難するのは、無理のない事にて、何時でも改革者と云ふものゝ非難攻擊を受くるは世の常でありまして、皆世人の見識の狹い爲であります、若し見識が廣ければ、素より改革者の起るべき必要がないのです、非難攻擊の起るのは、改革者の起つた甲斐がある證據です、そこで基督の教示されたる天倫は如何なるものかと申せば

「爾心を盡し精神を盡し意をつくし主なる爾の神を愛すべし」

と云ふ言にて云ひ盡くされて居る、之を約言せば全力を盡くして神を愛すべしと云ふ事です、神を愛するには、其愛すべき義務の起る所以を申さねばならぬ、其義務の起る所以は、神と人との關係に在ります、凡て義務は關係に由て起り、關係の異なるに從て義務も異なるもので、親に對すれば孝となり、兄に對すれば悌となり、朋友に對すれば信となる、然らば神と人との關係は如何なるものなる乎を尋ねて見るが必要です、

(一)神は人間の創造者

人間の起原につきては學者等は種々の說を立てゝ、人間と云ふものは動物より進化したもので、始から人間ではない、人間の先祖は動物、其動物の先祖は虫だと云ふやうに說て居りますが、基督教ではそんな說を取りません、神が人間を創造したものと敎へます、そんならば我々は神より出でたるもので、神は我々の生命の本原です、無關係の神ならば

之に對する義務がない、若し國々の神ならば其國民の神なれば、其國民と密着の關係があつても、他の國民と關係がない、天照皇大神は英國民や米國民に關係がない、ジユペタルやマルキユレーは日本國民と關係かないけれども基督教の神は國民の神ではなく、人間の神てある、故に人間一般に關係があつて、萬民に對して創造者の地位にあるものです、我々を生んだ父母には親子の關係があるから孝道を盡くすべきの義務あらば、同じ道理て我々を創造したる神にも孝道を盡くすべき義務があります、殊に我々は先祖を敬ふの美風を有する人民であれば、親の親たる、先祖の先祖たる神を敬ふべき筈であります是れ神を敬ふべき義務あることは知れて居ります、

(二)神は人間の保護者

神は人間を創造して其儘に放任したのではなく之を保護するの道を

設け、今日まで其保護に由て人間が繁殖して來たのです、世には生んだばかりで養育しない親が澤山あります、此の場合には子たるものが勿論自分を生んで呉れた親を敬ふが自分を養育して呉れた人をも親の如くに敬ふ故に、生んだばかりの親は養育をした親と同じやうに子の尊敬を受ぐることは出來ぬ、世に不孝の子があつて折々親に對して惡むべき所行のあるのは、大抵は生んだばかりの親に對して行ふことのやうに見えます、神も人間を創造したのみならば、之に對する關係が幾分か薄いが、神は創造した上に其保護を加え、何も不自由のないやうに、世界に必要の物を備へ、幸福を得るの道を定めました、口に合ふ美味もあれば、目を、樂ましむべき花もあれば、耳に樂しき音樂もあれば、心に樂しき眞理もあれば、何一として欠くる所がない、一寸見ては不便なる物、有害の物もあれども、是等は神の深き聖旨の存ずる所で、人間の智力又

は、徳義を發育せしむるの方法である、世界でも餘り物の足り過ぎる家に生れた子に人物のなき如く、不足を感ぜぬ世界に生れた人は其能力を發達せしむる事が出來ぬものです、然らば不便に見ゆるものは將來の爲には便利なるもの、不足に思はるゝものは、將來の爲に滿足なるものです、子の心で親の心が測かれぬやうに、人間の心で神の心が測かられぬ、何でも智慧ある神の行ふ所は、人間の幸福の爲めと信ずるのは、神を信ずる人の心とす、社會の事でも人間が獨りで爲して居るやうだが、人の見えぬ所に神の御手が加はつて、人間の最大幸福の方向へ導ひて居ります、もし左樣でないとせば、近頃日本人の口にする「天祐」は偶然と云ふ事の外は何の意味もないものとなります、

(三) 神は人間の主君

人間が前に申した如く、神に創造せられ、又保護せらるゝにも拘はらず、

罪惡を犯して神を遠かり、嚴刑に處せらるべき反逆人となり、最も腐敗を極めたるものなれども、神の深き慈愛に由り、再び人間を救ふて神に歸らしむるの道を開き、何人にても自由に信仰によりて救はるゝやうに準備をなされました、即ち基督の贖罪は罪人の再び神に歸るべき道であります、是は實に大なる恩惠にして、神の人間を愛し給ふ大御旨を現はしたものです、罪惡の中に居るものは神の謀反人て、惡魔を己が主君と戴くものです、けれども悔改して基督の贖罪に由り救はれたる人は惡魔の支配を脱して、神に立ち歸へりたるものなれば、神を主君と戴くものです、既に神を主君となし、自分は之が臣僕となれば、更に新しき關係をもつたものです、臣にして君に忠を盡くすは當然の義務にして、一日も忘るべからざる事です、然らば楠公や、諸葛孔明の如く、己れを忘れて君に忠實を盡すは、信者たるものゝ本分たることは申すまでもな

き事です、

以上述べたる事は我々何故に神を愛すべきの義務あるかと云ふ理由を畧説したるに過ぎませんが、若し我々は是等の理由を心に記さば、神を愛するに於て、怠ることがなからうかと存じます、是より神を愛するの道を説きます、

神に對する愛の意義

同じく愛すると申しても、其關係の如何に依りて其愛の意義を異にするものなれば能くこの區別を知らねばならぬ、子の親を愛するの愛と、親の子を愛するの愛は同じではない、兄弟の愛と夫婦とは違ふものだ、主僕の愛と朋友も異なるものだ、故に愛と申しても一概に同じやうに考へられぬ、若し是等の愛の區別を混亂したならば、人倫を全ふすることは到底出來ぬ、親子の間は兄弟のやうではならぬ、主僕の間は朋友の

やうではならぬ、夫婦の間は主僕のやうではならぬ、然らば神を愛するとは如何なる愛でせうか、兄弟の愛でもない、朋友の愛でもない、夫婦の愛でもない、先づ人間社會に行はるゝ愛の中で能く似たものは君臣の愛又は親子の愛です、若し是れとても全く同じだと云ふのではない、唯稍や近きものを申すのです、

愛と云ふ意義には「すく」とか又は「かはいらしい」とか云ふ意義があるけれども是れは或關係より生ずる愛の意義であつて、愛は一般にこの意義があるものと考へてはならぬ、この意義は多くは上の者は下の者を愛する場合、又は強き者は弱き者を愛する場合の愛です、又は殊別の關係がなくも、自分の氣に合つた場合の愛です、故に「すく」又は「かはいらしい」はすべて愛する場合には必ずなくてはならぬものではない、子は親をすかぬも愛せねばならぬ、弟は兄をかはいらしく思はなくても愛せ

ねばならぬ、

「すく」又は「かはいらしい」と云ふ感情は、愛を助くるには相違なきも、なくではならぬと云ふ事ではない、人間が神を愛するは「かはいらしい」と思ふて愛するのではない、氣が合ふから「すく」と思ふのでもない、神を愛するとは、(一)神を尊敬し、(二)其御心を喜ばせ、(三)其律法を遵奉し、(四)其榮光を顯はすことです

(一)神を尊敬するとは宮殿を造て之を祭り供物を献じて禮拜するのではない、神は宇宙を宮殿として居らるゝもので、人の手に造られたる宮殿を要せぬ　パウロが申すには「それ宇宙と其中の萬物を造り給へる神は是れ天地の主なれば手にて造れる殿に住みたまはずかつ衆人に生命と氣息と萬物を予へたまへば物に乏きことなし人の手にて事へらるゝものにあらず」と(使徒行傳十七〇三十四、三十五)しかし基督教にも

禮拜はあります、その禮拜には形もあり、精神もある、今日教會に於て讃美や祈禱をなして禮拜するのは、禮拜の形にして、それのみならば偶像禮拜と違ふ所はないが、精神上の禮拜がありまず、形の上の禮拜は、精神上の禮拜を助くる爲のもので、精神上の禮拜を離るゝ時は何の効力もないものです、基督は禮拜につきて教へられたる言には「眞の拜する者靈と眞を以て父を拜する時來らん今その時になれり夫れ父は是の如く拜する者を要め給ふ神は靈なれば拜するものもまた靈と眞をもて之を拜すべきなり」とあります、靈とは精神の事です、物質上の禮拜ではなく、精神上の禮拜でなければならぬ事を云ふのです、眞とは眞心の事です、至誠の心です、古人も

いのりてもしるしなきこそまことなれいのる心に眞なければ

と申した如く、眞心がなければ神を禮拜することが出來ぬ、眞正の禮拜

は至誠より發する尊敬です、眞正の尊敬は眞正の愛です

(二)神を愛するには神の御心を喜ばすやうにせねばならぬ、聖書には「信仰なくば神を悅ばすこと能はず」と記してあります、孝子は親を悅ばす如く、我々は神を悅ばさねばならぬ、しかし親を悅ばすことゝ神を悅ばす事とは違ふ所がある、親は色々の事につきて心配して居る時に、子は親切に之を慰めて其機嫌を取るが、人間は神の機嫌をば取ることは出來ぬ、神を慰むる事は入らぬ、神は人の世話を要せぬ、然らば如何に神を悅ばすかと云ふに、信仰を以て之を悅ばすのです、たとへば親が何か子に申すに、子は少しも之を信せず、親の云ふのは多分眞ではあるまいと申せは如何、親が之を悅びますか、人は他人に信用されぬ程殘念なる事がなく、まして親が子に信用されぬ事は如何程の殘念か知れぬ、人は狽りに他人を疑ふは不敬であるまして子か親を疑ふは此上なき不敬で

ある斯の如く人間が神を疑ふが如きは不敬中の不敬である神を信ずる人は何でも神に從ひ、よく神に依頼する人です依頼するは厄介を掛けるやうではあるが、何となく依頼を受ける人の心に合ふものです、依頼する子は愛らしいが、依頼せぬ子は愛らしくない、自分に依頼する人あれば、信用して異れるものと思ひて自然に愛する」ものです、神は人とは少々違ふものてありますが、兎に角神が其言の人に信ぜられ人が全く己れに身を任せて事ふる事を悅ばるゝやうに見へます、故に神を信じ之に依頼することは大に其御心を悅ばすことであります、其御心を悅ばすことは矢張神を愛することです、されば神を愛する我々は常に信仰を厚くし、何事にても能く神の言ふ所を固く信じて、天が落ちても山が崩れても、信ずる所を動かさぬやうに致したいものです、

(三)神を愛するは情よりも行に在ります、素より神に對して難有いとか、

尊い者だとかと感ずる事が必要ですが唯、感ずるばかりでは神を愛する事が出來ぬ、神の命令を遵奉するの實行は即ち神を愛することの重なる部分です、基督が其弟子に申された言には「若しなんぢら我を愛するならば我誡を守れ」とあります、基督に對する愛も、神に對する愛も其道理は同じことです、我々は親の機嫌を取つても、其誡を遵奉しなければ、親を愛するとは云はれぬ、其通りに神を禮拜する儀式を固く守つても、其誡を遵奉せぬものは、かのパリサイ人やサドガイ人の如く不忠不義のものです、精神を盡くして嚴重に神の誡を守る人は實に神を愛するの人です、然らば其愛を盡さんには神の誡即ち其律法を知つて居らねばならぬ、神は人間には色々の律法を與へて居ります、それは聖書の各部に記されてある、故に詳細に聖書を研究せねばならぬ、また神は殊別に我々に命ずる事がある、其命令は別に聖書の何書何章何節に記し

てあるのではない、其人の心に直接に命ずるのであれば、當人の外は知らぬ、即ち自分の良心にて是は神の我に命じたる事だと感ずれば、斷然勇氣を振起して之を實行せねばならぬ、即ちそれは自分の天職であるから全力を以て之を實行せねばならぬ、それは神に對するの愛です、それ位の精神がなければ神を愛する事が出來ぬ、神を愛するの人は神の命ずる所を遵奉する忠義の人です、

(四)神の榮を顯はす事は信者たるものゝ大目的でありまして、實に神を愛するの行である、神の榮を顯はすと云ふ事は如何なる事かと云ふに、神の智慧や仁愛を世の人に知らしむるのです、そんならば神は何故に御自分で御自分の技量を世に知らしめぬかと問ふ人もありませうが、それは神には出來ぬから人に命ずるのではない、神は既に古より其造れる萬物に由て其智慧や能力を示して居ります、「もろ〳〵の天は神の

榮光を顯はし蒼穹はその手のわざを示す」と詩人ダビデの歌ふたのは之が爲です、神は御自分で榮光を顯はす外に、人に由て榮を顯はさんと望み給ふものです、何ぜなれば天の日や月や星も甚だ立派なるもので、神の智慧が顯はれては居りますが人間は萬物の靈長で、靈妙を極めたる神の工であります、即ち人間程神の智慧や仁愛の顯はるゝものがないのです、爛熳たる春の花も、皎々たる秋の月も、之を人間に比すれば顏色がない人間は美の美なるもの、妙の妙なるもの、神の像を具へたるもの、神の秘密に滿されたるものです、萬物は神の手や足を示すに過ぎないので、人間は神の御顏を示すものです、人間に由らずば神の顏が知れぬ、そこで人間は神の榮光を顯はすべき責任があるのです、然らば人間は如何にせば神の榮光を顯はす事が出來ませうか、言で神につきての知識を示すことも其方法の一てあるけれども其最も重なる方法は神の如くなる事です、神の如くなると全知全能になるのではない神の如く潔く、神の如く慈愛に富み、神の如く美しき品性を具ふる事です、故に神の榮光を顯はすには自分の品性が高尚にならねばならぬ、自分の品性を通して神の品性を顯はさねばならぬ、斯の如き道理なれば神の榮光を顯はすと同時に人間も高くなつて、自然に自分の榮光も顯はるゝのです、器械の巧妙は製造者の榮光を顯はすと同時に器械其物の榮光を顯はして居る、自分を潔くし、自分を高くして神の榮光を顯はす事は、是れ啻に自分の發達のみならず、實に神に對する愛の道を盡くして居るのです

天倫と人倫との關係

天倫即ち神を愛すること、人倫即ち人を愛する事とは如何なる關係のあるものかを研究せねばならぬ、この兩倫の間には密着の關係があり

まして、申さは天倫は人倫の基本とも云ふべきものです、何故に聖書には天倫を以て最大の戒と申したかと云ふに、天倫は人倫の基本だからです、天倫が明かになれば人倫も明かになる、宇宙に運行する天躰の互の關係は其運行の中心たる太陽との關係に由て定ります、即ち太陽との關係が知れて、互の關係も知れるのです、此に二人の相知らぬものがある、其二人が何の關係を持つて居るかは互に知らぬ、然るに其二人は君主を同じふすることが知れて、始めて同國民だと云ふ事が知れます、即ち君主との關係が知れて始て互の關係が知れるのです、故に神に對する道を盡くせば人に對する道も盡くさるゝのです、今之を明かに示さん爲に儒教の孝道に比較して申しませう、儒教にては孝は凡ての道の根本だと教へて居る、孝が出來れば忠も出來る、其他悌も信も皆孝から生ずるものと云ふて居ります、孔子が申した言に「夫孝德之本也教之所由生也」又小學と云ふ書には「愛親者不敢惡於人敬親者不敢慢於人」と申して居る、是等の言に依て考ふるに、孝があれば他の道が自然に出來るもので、つまり色々他の德と云ふものが、孝と云ふ德の色々の場合に從て變じたものであると教ゆるのです、斯の如く基督教に教ゆる神に對するの愛も亦この孝と同じやうなるもので、神を愛するの人ならば、君にも忠を盡くし、親にも孝をつくし、其他凡ての德が出來ると云ふのです、然らばこの愛は凡ての德の根本であつて、葉も幹も花も枝も根より生ずる如くに、凡ての德はこの愛より生ずるのです、然らばこの愛こそ實に大切なるもので、德の根本ですから、誠の中にも最大なるものだと云ふのです、是れで天倫と人倫との關係が知れて居ります

第二章　第二の誡

「第二も亦之れに同じ己の如く爾の隣を愛すべし」

（馬太傳廿二章卅九）

「己れの如く爾の隣を愛すべし」との誡は、人倫を總括したる教てありまして、之をさへ全く實行が出來るならば、五倫五常も充分に盡くされて居るのです、人に對して盡くすべきの道は色々ありますが、それは關係に從て生するので、其天理とも云ふべきものは、己れの如く隣を愛する事です、人は社交的のものであつて、互に交際して生活を送らねばならぬもの、又交際して生活するには自分から他人を愛したり、また他人に愛されたりして始て幸福を得らるゝのです、故に相互に愛する事なくは世界は猛獸の棲所となつてしまうものです、孔子の仁を說くも、基督

の愛を語るも之が爲です、基督教はこの誡に由て世界を黃金世界にするの目的です、愛を以て嫉妬や怨恨や其他の罪惡を洗ひ去る目的です、神を愛し人を愛して達すべき理想の世界はイザヤに依て畫かれました、其言に曰く、

「おほかみは小羊と共にやどり、豹は小山羊とゝもにふし、犢を玄し肥たる家畜ともに居てちひさき童子にみちびかれ、牝牛と熊とはくひものを同にし、熊の子と牛の子と偕に伏し、獅はうしのごとく藁をくらひ、乳兒は毒蛇のほらにたはむれ、乳ばれれの兒は手をまむしの穴にいれん、斯くてわが聖山のいづこにても害ふことなく傷ることなからん、そは水の海をおほへるごとくエホバを知るの知識地にみつべければなり」

愛の道が行はるゝならば、世中は一致和合して樂しくなります、是の如

きは啻に基督教徒の理想のみてはない、古の聖人や賢人の理想も此にあつたのです、孔子は其弟子の子路、子貢と顔回を伴ふて農山と云ふ山に登つた事があつた、其時孔子は四方の景色を眺めて申さるゝには、この山に登て四方を見れは樣々の思が起て來る、爾曹は其思ふた通り各々申したなら善からうと、其時子路が一番に進て申すには、月の如く白き羽や、日の如く赤い羽て矢を造くり、大鼓陳鐘などをうち、天も動く程の勢て、白い旗や赤い旗を立て、敵と戰爭をなし、我は大將となつて千里も敵兵を退けたならば、子貢や顔回も我が手下になる、それは實に我が願ひてありますと、孔子は其勇氣の盛なることを御賞めになつた、其次に子貢は進て申すには、我願は齊の國と楚の國とは廣い野て戰爭をなし、兩方の壘から兵士が押し出し、將に劍を以て打ち合ひする場合に、我は白き冠を戴き、白き衣を着けて兩方の陣に至り、利害得失を說て和睦

をさせて見たい、我が辨て必ず、成功すると思ひます、然らは子路や顔回が我が手下になると、孔子は其辨を御賞めになつた、此度は顔回の番たが、顔回が退て默して居つた、孔子が申すには、回よ爾も何か思ふ所を云はぬかと、そこて顔回が申すには、文と武の事は子路と子貢が申し盡した故に、何も回の申す事はありませんと、孔子は强ひて顔回に思ふ所を申せよと云ふた、顔回は申すには、香ばしき物と臭い物と同じ器物に入れて置かば、混合してやくに立たぬやうになる、堯帝のやうな仁君と、桀王のやうな暴君とは共に國を治むる事は出來ぬ丸で心が別な人である、私の願は明王聖主を擇で其宰相となり、五教の道、父子兄弟の教を施し、禮を以て其教を導き、樂を以て風俗を化し、民を正路に導かば、城郭も武器も入らぬやうになる、劍を以て鉅鎌の農具に代へ、牛馬を野に放ち、夫婦睦じく居れば千歲の下までも戰爭がなく、泰平に治まる、子路の勇

を振ふことも、子貢の辨を振ふことも、入用がなくなりますと、孔子が之を聞て其言の眞に道理に合ふた事を驚いて御賞めになつた、即ち孔子は顏回に贊成をなしたのです、孔子や顏回の理想もなか〳〵高尙なものです、この理想を實際に現はすには第二の誠の如くに、己れの如く隣を愛せねばならぬ、是れよりこの誠の精神を研究して見ませう、それには「己の如く」と云ふ事を研究せねばならぬ、

自愛

凡て生きたるものは己れを愛せざるものなく、人間より混虫に至るまで皆この情なきものはない、この情ありてこそ其生命も繋がるゝのです、故に自愛と云ふものは生命維持法と云ふべきものです、そして自愛は本能にして、決して學んで自愛を知つたのではない、何の爲に我を愛するかと云ふに、自分が人よりも優るからと云ふ事でもない、自分に尊

ふべき德があるからと云ふ事でもない、唯我たから我を愛するのです、故に聖人も己れを愛し、惡人も同じく己れを愛す、この情あるが爲に人間が生活をなし、色々困難を受くるにも拘はらず知識を研き德を修むるのです、自愛がなければ人間の進歩もなく、何人も救を願はぬやうになる、故に自愛は甚だ必要なるもの一日も欠くべからざるものです、そして自愛と云ふものは神の賦與したる情であるが、之を適當に養成せぬ時は、非常の禍を釀すものとなる、今日世に行はるゝ憎むべきの罪惡は悉く自愛の弊害と申すべきものです、自愛は自分の幸福を全ふするに必要なるものです、けれども之を濫用するに由て自分の禍の基となる、世には其弊害の甚しきより自愛と云ふものは善くないものゝやうに考ふるに至りました、これは無理もない事ですが、もかし眞正の自愛は神の命する所にて、自愛を知らざるものは眞の人とはなれぬ、我を愛

することの出來ぬものは、人を愛することも出來ぬ、神を愛することも出來ぬ、我の價値を知らぬものは、人の價値をも知らぬ、我を敬ふことを知らぬものは、人を敬ふことをも知らぬ、我の幸福を顧みぬものは、人の幸福を顧みる筈がない、凡て物は己を推して人に及ぼすのである、故に先づ自分を愛することを知らねばならぬ、自愛を知るものは恥づべき事をなさぬ、自愛を知るものは自重の精神がある、自愛を知るものは自分の最大幸福を計る、我々は基督教を以て博愛主義なりと申しますが、それは自分を愛さずに他人を愛せよとの事ではない、他人の爲に自分を棄つるのではない、他人をは自分よりも先きにするのでもない、唯自分を愛するの情を弘く應用するのみです、即ち自分を愛するの心を他人までも及ぼすのです、決して自分と他人とを區別しないと云ふ事ではない、自分の家族と人の家族と同じものだとするのではない、己れ

の如く」とは自分と他人とを區別するな、他人と生存競爭してはならぬ、權理を爭ふてはならぬと云ふ事ではない、己れが幸福を願ふ如くに他人も同じ願がある、自分が權利を要するが如くに他人にも同じ必要がある、我の感する如く他人も感するものだと云ふ事を知つて事を行ふのです、この事を心に記して居れば、たとへ人と競爭しても無理な競爭がない、即ち己れを推して人に及ぼす心があれば互に無理非道の事を行ふの愛なく、互に己れの欲せざる所をば、人に施すやうな事は致さぬやうになる、故に自愛は他人の幸福を害さぬ限りは、飽までも自分の幸福を計る事を云ふのです、

他愛

他愛は自愛と全く別なものではない、其愛する目的物は他人だと云ふ丈けの違ひです、即ち自分を愛するの心を人に及ぼしたのです、そして

他人を愛することは自分を愛することゝ共に幾分か本能に基くものであるが、他人を愛する方は自分を愛するよりも本能が少ない、其代はりに道徳上の元素が多いものです、何せと云ふに自分を愛することは不道徳の者でも出來るが、他人を愛することは餘程道徳に富んだ者でなければ出來ぬからです、故に人の道徳の如何を見るには自愛を標準とするよりは他愛を標準とせねばならぬ、即ち如何程位他人を愛する乎を見るのです、基督教は勿論自愛を大切にするが、この自愛の心を人に及ぼす事を大切に教ゆるものです、人は自分と全く縁のないものを愛することの難きものであるが、何が縁があると思へば愛情が起るのです、基督教では人種や國の區別を問はず、人間が同じ神に造くられたるものであれば、皆同胞兄弟たると教へます、故に顔色は白くとも、黒くとも、言語は違つても、風俗は別でも皆兄弟たると思ひます、兄弟たると思ふのは

決して同じ國民たると思ふのではない、同じ人種たると思ふのではない同じ主義の人たると思ふのでもない、この區別を忘れぬやうに致したい、即ち萬物の創造者たる神に對しては皆兄弟たると云ふのです、決して國家を忘るゝのではない、或人は早合點して基督教は國家を埋沒するのだと思ふかも知れませんが、それは了見が狹いのだ、基督教は宇宙の宗教たるから、國家などは語らぬものだ、國家よりも上の事を云ふて居るのです、天躰の理屈を云ふ時に世界の事は云ふが、世界の中の國家の事は云はぬ、云はぬとても天文學は國家を亡ぼすものだとは何人も云はぬ、基督教は精神世界の事を云ふて居るので、人種や國家の事を云ふのではない、しかし基督教の元理はどんな少さい事にまでも應用が出來るようくこの事を覺て居りたいものです、基督教は世界の人間を兄弟と見るから、博愛と云ふ事は國の境も、人種の界も越へた話です、基督教の傳道

はこの主義に基て實行されて居る、即ち他愛主義を實行して居るのです、是れ他人の幸福を計るが爲です、己れの欲せざる所を人に施す勿れと孔子の申されたのは元より眞理なれども、是では甚だ不充分にして他人を愛するの道を盡くしては居らぬ、何ぜなれば己れの欲せざる所を人に施さぬは、唯他人を害する勿れと云ふに止まることです、他人を害さぬは善き事なれども、他人に己れの欲する所を施すことゝ比較すれば甚だ低き事とす、是れは消極的の愛であつて、積極的の愛ではない、他人を害さぬまでにて他人を助くるのではない、それでは愛の道に欠けて居る、己れ人にせられんと思ふことは人にも其の如くせよとは基督教の命ずる所である同じやうではあるが孔子の言には積極的の意義がない、基督の言には消極的は勿論の事、積極的の意義がある、故に我々は他人を愛するには啻に其幸福を害せざるのみならず、之を助くる

事をもなさねばならぬ、是れ完全の他愛と云ふものである、

隣とは何人を云ふや、

隣を愛すべしと命じてあるが、其隣とは何人なるやを知らねばならぬ、我々通例用て居つた意義では、自分の近隣のもの、又は同町同村位の意義で、弘く用たものではないが、この誡の中には甚た弘き意義で用ひられて居る、即ち近隣の人は申すまでもない、全く知らぬ他人、即はち國と か法律とかで繋て居るものでなく、全く人種までも異なる所の人、更に恩のないのみならず、自分の仇敵に至るまで皆隣と云ふ言の中に包括されて居るのです、故に隣とは上下貴賤の差別なく、恩怨の有無を問ふことなく、凡ての人間を包括したものである、是が即ち博愛です、家族の愛とか國民の愛と云ふものは、勿論貴ぶべきものであるが、それは制限ある愛です、隣を愛する中に包括されてありますが、基督教の愛は

其狹い事に制限されて居るものではない、まだ〳〵弘く行き渡るものです、基督教の愛は太平海のやうなもので、家族の愛や、國民の愛は東京灣のやうなものです、我々の隣人とは同國民は勿論のこと、支那人でも、露國人でも皆包括して居るのです、即ち人類全躰を包括して居るのです

愛敵の教

基督の誡に曰く、「爾の隣をいつくしみて其敵を憎むべしと」いへることは有るは爾曹がきゝし所なり、されども我れなんぢらに告ん、「爾曹の敵をいつくしみ爾曹を詛ふものを祝し、爾曹を憎むものを善視し虐遇迫害するものゝ爲に祈禱せよ」と、パウロも亦曰「爾の仇もし飢なば之に食はせ若し渴かば之に飲せよ」と是等の言皆敵を愛すべきことを教へたものです、さかしこの教は言ふことの易くして、實行の甚だ難きものです、恩人

ならば之を愛する事が易い、自分の好む人ならば之を愛することが易いけれども自分の惡むものを愛するとは、一寸自家撞着のやうに見える、惡む者を愛すとは、愛するものを惡むと同じことで、つまり行ふべからざることですが、それは愛することの意義が明かでないからです、惡むべきものは愛されぬ、愛される位ならば惡くむべきものではない、然共よく基督教の精神を考ふるに、敵を愛せよとは、敵をかはいく思へと云ふのではない、敵の精神をすけと云ふのでもない、敵は惡むべきものですけれども敵だからと云ふて之を殺すとか、又は他の方法で怨を報ひねばならぬとか云ふ事は、若し政府があつて之を處分するにも拘はらず、自分が親から手を下して怨を返さんとするは宜しくない事です、復讐は基督教の精神に違ふ事です、敵を愛せよとは啻に復讐するなと云ふばかりではなく、敵の幸福を計つてやることです、かはいく思ふの

ではないが、かばいそうと思ふことです、其敵の己ぼさるゝことを求むるのではなく、其悔改するを願ふのです、敵を愛するにも消極的と積極的要素がありまず、敵を赦免するは消極的の要素です、敵を赦免すると、は、神の如く又は政府の如く敵免するのではない、國法上又は道德上の罪人は我々之を赦免しても、無罪とはならぬ、我々の赦免とは犯罪者に對して悪しき感情を取り去り、復讐の念を絶つのです、積極的要素とは加害者の爲に祈り、之を祝してやる事です、これは最高最美の愛です己れを愛するものを愛するは愛の低きものです、己れに恩怨のないものを愛するは更に愛の高きものです、己れの敵を愛するは難中の難であるが故に、之を實行するは愛の最も高きものです、第一の愛は水の山上より流れ落つるやうなもの、第二の愛は水の平地を流れ行くやうなもの、第三の愛は水の山上に上るやうなものです、基督は己を十字架に釘したるものゝ爲めに「父よ彼等を赦し給へ」と祈りました、最初の殉教者ステパノも殺さるゝ時に「主よ此罪を彼等に負はしむる勿れ」と祈りました、實に赦免は純粋の愛です、敵を赦免するのみならず、之が爲に幸福を計るには、深淵の如き度量が入る、この度量は基督を摸範として學ぶ事が出來る、若し敵を愛する事が出來るならば、是れ基督教の奥義に達したるものです、神の心を以て心とする人です、

第三章　愛の諸態　其一

「愛は寛忍をなし又人の益を圖るなり愛は妒まず誇らず、驕傲らず非禮を行はず己れの利を求めず輕しく怒らず人の惡を念はず不義を喜ばず眞理を喜び凡そ事包容おほよそ事信じ凡そ事望み凡そ事忍ぶなり」

（哥林多前十三〇四、五、六、七）

愛は猶ほ水の如きもので、實質は同じでも場合に應じて色々に變化するものです、古人の歌に

雨あられ雪や氷とへだつれど
とくれば同じ谷川の水

とある如く、愛も色々に形を變じて世に存するものです、此に掲げたる聖書の言は即ちこの變態を示したもので、細に見ればまだ〳〵變ずる

でありませうが、パウロは其大畧を示したのです、今其記する所を見るに、變態にも二種の別がある、即ち消極的と積極的の別があるのです、其中消極的の變態を擧ぐれば左の如きものです、

(一) 愛は妒まず
(二) 愛は誇らず
(三) 愛は驕傲らず
(三) 愛は非禮を行はず
(四) 愛は己れの利を求めず
(五) 愛は輕々しく怒らず
(六) 愛は人の惡を念はず
(七) 愛は不義を喜はず

其積極的の變態を擧ぐれば左の如きものです

(一)愛は寛忍をなす
(二)愛は人の益を圖るなり
(三)愛は眞理を喜ぶ
(四)愛は何事も包容む
(五)愛は何事も信ず
(六)愛は何事も望む
(七)愛は何事も忍ぶ

是等の諸〻の變態は太陽の光線の七色に變化したるやうなもので、道德界を飾る所の虹は愛の諸〻の光線より生ずるものです、是れより順序を追ふて是等の變態を説明致しませう、

(一)愛は妬まず

嫉妬の心は如何なる場合に生ずるものかと云ふに、貴賤貧富即ち上下

優劣の差等あるより生ずるものです、賤いものが貴い人を妬む、貧しいものは富める人を妬む、下のものは上のものを妬む、劣たものは優つたものを妬む、一口に云へば他人の幸福を妬むのです、是れ人情の免れ難きものではあるが、若し之を制せぬ時は大なる禍を來たすものです、人間社會に等級のあるのは自然の道理で、不平均が免れぬ、けれども是は社會の罪ではない、正に然るべき道理があるのです、人々の技量や勤勉の多少に應じて等級が生ずるので、決して惡しき事がない、それを妬むは妬む人の惡いのだ、愛の心がないからです、若し妬む心があれば妬む心に止まつては居らぬ、其人を憎むやうになる、憎む心があれば其人を害する心が起る、人を害するは愛の道に合はぬ事です、故に愛する人は妬む事がないのです、然れども此に注意すべき事がある、愛のある爲に妬む心が起る事です、聖書には神は妬むとある、是は愛がないから妬む

のではない、あるから妬むのです、人は神に造くられ、神の保護に由て安全を得るものなるに若し人は神を離れて偶像邪神に事ふる時は、神が妬むのです、是は妬む神の悪いのではない、妬まるゝ人の悪いのです、是れは夫婦の情より引て來た比喩です、夫婦にして其一方が道を破ぶるならば、他方は之を妬むのです、世間では之をも悪い事のやうに云ふが、斯の如き嫉妬は天然の道理に合ふ事で、決して罪ではないのです、何ぜなれば關係のない他人の幸福を妬むのではない、我が幸福を奪はれたるを妬むのだからです、是は妬む人の悪いのではない、妬まるゝ人の悪いのです、古來嫉妬深きものは婦人だやうに云ふが、夫れは多くは人の妻であつて妬むべき理由があるのです、一夫一婦の道が行はれて居れば妬む事がないが、其道を破るから妬まるゝのです、妬まるゝ人の悪いのだ、然るを嫉妬は婦人の疾のやうに女扁に疾を書いて嫉むとするは、

未だ人道を知らぬものゝ云ふ事です、嫉む事は男も女も同じ事です、是等の事は注意すべき事です、

（二）愛は誇らず驕傲らず

驕傲尊大に構へて人を眼下にみくたすことは不道の甚しきもので、毫も他人を愛するの心ないことです、たとへ自分が才智も優り、財産もあるとしても、之を誇るの心あれば、之が爲に人を侮り、輕蔑するやうなる行をする、人の感する不快中にも、人に侮辱され、又は輕蔑さるゝ程不快な事がない、高慢の人は自分の威光を輝かさんとするの外は何も思はない、人の事を思ふなどの猶豫がない、自分の無力の時は、人に媚て卑劣な事をなせども、一度幸運に遭へは以前の朋友をも顧みぬ、獨り尊大に構へて高ぶるものは世間に多いものです、是は愛の道を知らぬからです、愛のあるものは甚た謙遜なものです、神の位に坐する方でも、人間

を愛するが爲に人間界に下つて奴僕のやうに生活した、先生てありなから弟子の足を洗ふた、そして申さるゝには「我が爾曹を愛する如く爾曹相愛すべし」と、然らば足を洗ふの謙遜は愛から出たのです、愛は高ぶるものではない、仁德天皇は位は至上にましませども、宮殿やぶれて雨露もたまらず、宮人の衣もやぶれて見る影もないが、之に少しも御心をかけ給はず、民の富めるは朕が富なりと宣給ひて、民の事ばかり御心にかけなされた、至尊の御身にして筆にも言にも盡くされぬ御困難を忍はれたのは、天皇の大なる謙遜です、それは

高屋にのぼりてみれは烟立つ
民のかまとは賑ひにけり

との和歌に現はるゝ下民を御慈しむ御心の結果である、之を見ても愛は誇らず、驕傲らぬものだと云ふ事は明かであります、

（三）愛は非禮を行はず

非禮とは無禮又は不敬と云ふ事で人に對して敬を欠く事です、人を敬はぬは矢張自分の心の中に高慢なる所がある爲で、高慢なる心を持つ人は人に交はれば必ず非禮の行をするは常です、自分がたとへ高位高官に在る人でも、人を愛するの道を心得てさへ居れば、如何なる下の者に向ても相應の禮を行ふものですが、愛心のない人は無禮を加ふるものです、自分よりも下のものと思ふて輕蔑し、又は侮辱するものです、愛の道を知つて居る人は何人をも敬ふ故に、何人にも禮を欠く事がない、朱子と云ふ人の申した言にも、禮の本は人を敬ふに在りとあります、敬ふの心は愛の心です、己れよりも尊き人に對するの愛は敬となります、故に愛する人は敬ふものです、敬ふものは禮を盡くすものです、朱子が「禮は仁のあらはれたるものなり」と云ふたは能くこの道理を現はし

たのです、そして人に非禮を加ふることは啻に自分の失行のみならず、他人の心を不快ならしめ、交際を破るの本です、衆人の幸福を求むる愛の精神とは其合はぬことは水火も啻ならぬものです、

(四)愛は己れの利を求めず

愛は一樣に人を愛することにて、己れの利をのみ求めやうとすれは愛の道を行ふ事が出來ぬ、愛は凡ての人の利を求むるものです、己れの利のみを求むるの人は私欲の人にして、どこまでも他人の事を思ふ心がもてぬ、他人の利を奪つても我が利を求めたいのです、すべての手段を盡くして利己心を滿足させたいのです、どうして他人の利を顧みる事が出來ませうぞ、愛と云ふものは献身的のものです、子を愛する親は子の爲めに自己の利を棄てます、君を愛するの臣は君の爲に自己の利を顧みません、愛はどんな場合に働いても、献身的の性質を帶びております、基督の愛の大なる丈け其献身的の事業も大いなるのです、故に愛と利己心と兩立が出來ぬ、自分の利益を標準として立つ人は愛の道を知らぬ人です、人倫五常の道を破る人は私慾に迷ふた人です、愛は凡ての人の利を求むるが故に、己れの利をは求めません、しかし愛する心のある人は一切自分の利を求むる事がないものと思へは誤解したのです、信者が商業が出來ぬと思ふてはならぬ、正道に合ふ以上はどんなにても利益を得らるゝものです、信者は財産家であつてはならぬと誤解してはならぬ、唯自分の利のみを求むるのではない、商法家なとは不法の方便を以て自分を利し、他人の損を何とも思はぬ、是は愛の道ではない、愛の道を實行する人は何人にも利を得せしめ、自分も亦利を求むる公平の人です、

(五)愛は輕々しく怒らす

怒は人間自然の情にて、生きたるもの即ち情のあるものに怒らぬものがない怒と愛とは兩立が出來る、怒のない愛は眞の愛てはない、父母は愛に充ちて居るが、子を怒るものです、神は仁愛の神であるが、人を怒るものです、怒は情の火のやうなもので、火の不潔物を燒き潔むる如くに、怒は不正不義を斥くるものです、聖書には全く怒を禁じた言がない、基督教徒は罪を怒る事を知らねばならぬ、基督の怒つた事が聖書に記して居る、基督は其弟子を怒つた、弟子は嬰兒の基督に近寄る事を禁した時に怒を發された、弟子は天國の民に必要なる資格は赤子の心てある を知らず、反て高慢を以て謙遜を退けたからてす、地獄に至るべき資格を以て天國の民の資格としたからてす、天國の花園に植付くべき美麗の花を揉み破らんとしたからてす、基督の怒は大なる眞理を教へ、また、基督が怒らぬならば今日基督教は小兒の宗教でないかも知らん、今日のやうに小兒の宗教的教育は發達せぬかも知らんです、愛は怒るものてす、けれとも輕々しくは怒らぬものてす、愛のないものは怒るべからざる事まても怒る、怒つても益のなき事まても怒る自分の不快の情に任かせて罪なきものまても怒る、愚なる親は自分が何か失策して不愉快て堪らぬ時には、子供を怒つて氣晴にする、愚なる夫は外の不愉快を家に取入れて妻を怒る、姑は嫁を怒る、是等の怒は一時の狂氣のやうなもので、自分の無慈悲や愚かなる事を示すのみです、愛なる人は他人の幸福を計るがために、猥りに怒る事がない、自分の氣晴のために他人に不快を與ふるものではない、愛する人は謙遜であるから、人と衝突しても他人が曲つたと一概に思はぬ、必ず自分に顧みる所がある、聖德太子の憲法にある通りです、

「怒を斷ち怒を捨て人の違ふを怒らざれ、人皆心あり、心各取る事あり、

人に道理ある時は我に僻事あるべし、我に道理ある時は人に僻事あるべし、我必ず聖人にあらず、人なべて愚人にあらず、共に皆是凡夫たるべし、是非の理は誰か之を分ち得んや」

かくの如き精神あれば怒る事がない、人を愛敬するの心あれば之を守ることが出來る、世の人の怒は多くは憎いから怒るのです、愛する心がないから怒るのです、愛は怒る事があるが、輕しくは怒らぬ、故なしに怒らぬ、氣儘に怒らぬ、唯不義を怒るのみです、

(六)人の惡を念はず

一度憎む時には其心を以て人を評するもので、たとへ其人の善い行でも、之を善いとは云い度くないのは人情です、たとへば人が慈善の行をしても、かれは眞心よりなしたのではない、かれは名譽心からなしたのだ、中々油斷のならぬものだなどゝ人を惡評するのです、善い事さへも

惡評さるゝならば、凡ての行は皆惡評さるゝに極まつて居る、自分の偏頗な心から何でも惡く見るのです、そして愛のある人は少し位の惡い所でも之を恕して念頭に掛けぬものです、故に同じ事でも惡いと惡へば惡しく見へ、愛らしく思へば善く見ゆるものです、むかし或人の家の屏損じたが、其家の子の云ふには屏が損じたから盜賊でも入りはしないかと、隣人も來つて子の云ふ如く云ふた、然るに其夜果して盜賊が入つた、そこで親が自分の子をば智慧のある子だと申し、隣の人をばもしやあの人は盜賊の手引でもやつたのではあるまいかと申したとか、愛すれば善く思はれ、憎めば惡しく思はるゝものです、けれども愛のある人は何人をも隔てなく愛するから、人の惡をば念ひません、たとへ惡があつても之を恕して念頭にかけません、

(七)愛は不義を喜はず

眞正の愛は道理に合ふ愛で、何でも愛すると云ふのではない、人が義を行ふても、又は不義を行ふても頓着なしに之を愛するのではない、正不正義不義の區別を立てゝ、もし不正あらば自分の愛する人でも之には賛成するのではない、正は正とし、不正は不正として、決して其不正までも正のやうに思ふのではない、もし不正までも正のやうに思ふて之を愛するならば、それは世俗の愛と云ふものです、即ち姑息の愛です、全躰愛は他人の幸福になるやうにするので、唯機嫌を取ると云ふのではない、機嫌を取るのが主意ならば、何でも賛成しさへすれば機嫌が取れる、其代りに其人の幸福を計る事が出來ぬ、何せなれば、其人の不正に反對せすば遂に不正の人となつて亡ぶるの外ないからです、是も或は愛かも知らん、けれども基督教主義の愛ではない、眞の心より親を愛するの子は親の不義を諫むるではありませんか、眞の忠臣は君の不義を諫む

るではありませんか、湯武は諤々を以て昌へ、桀紂は唯〻を以て亡ぶと申す事があるが、是は湯王や武王の臣は諤々と直言して諫めたから昌へたので、桀王や紂王の臣は阿りて何んでも善し〳〵と云ふて君の氣に入るやうにしたから、亡んだのです、何れが愛の道に合ひますか、必ず不義を喜はぬ臣は愛の道を實行したのです、然らば我々も亦人を愛するには、時としては人の氣に逆ひて諫めねばならぬ、たとへ之が爲には自分に不利があつても、之を諫めて惡より救はねばならぬ、もし然らずば藥は苦いからと云ふて飲まさぬと、同じやうです、其結果は人を殺す外ない、愛は人の爲を計るが故に、人の不義を喜ばずして、之を矯正するのです、是れ基督教主義の愛です、以上は愛の消極的變態を畧説したので、次章には其積極的變態を解きませう、

第四章　愛の諸態　其二

前章に於ては愛の消極的變態を述べましたゆゑ、本章に於ては其積極的變態を述べませう、

(一)愛は寛忍をなす

寛忍も矢張忍耐の中にありますが、パウロは別に愛は「凡そ事忍ふなり」と申して區別した事を考ふれば、其間に少々意義の違ふ所があると存じます、寛忍は單に自分が六ケ敷事業を企てゝ忍耐すると云ふ事ではない、是は人に對しての忍耐です、寛大にして他の人の失禮を餘り怒らぬ事です、人は中々横着なもので、自分の過失に對しては甚だ寛大にして之を赦すが、他人の過失に對しては甚だ酷なもので、少しも容赦せぬものです、是は自分を愛して他人をば愛さぬからです、斯く他人に對し

ては薄情なるがゆゑに、他人が自分に對して不禮を加ふる時は容赦する所なく、之に復讐するか常であります、けれども愛ある人はそんな無情な事はせぬ、忍ち之を容赦する、若し社會に關する大事なれば容赦は致しませんが、一個人の事なれば容赦して問はぬ、是は愛の深からです、即ち寛仁大度だからです、少々の欠點や過失を發見して他人を責むるが如き人は小人です、この寛忍を實行するには常々心得べき事は、度量を大きくする事です、容易に情を激さぬ事です、秀吉の乘船伏見に到着した時に、岸に倒に長竿を立てゝ肩衣をその上に掛けてあつた、秀吉之を見て冷笑して申すには、この悪戯をなしたものは誰ぞと、そして左右を顧みて云はるゝには、是は謎だから汝曹解いて見ろと、けれども皆解けませんと御答をした、秀吉公の申すには「袖なきもの」上にあるは世事顛倒したのを諷したので、邦語に「そでなきもの」とは其人ではないと云

ふ事だと、然るに捕吏は其悪戯をしたものを拘引して秀吉の御前に携へ來た、公申すには汝憎むべきものだが、予を警めたものだ、他人にこんなことをしては爭の本だ、愼で再び爲してはならぬぞとて金を御施になつた事があります、實に秀吉は寛大な人である、是は寛忍と云ふ事によく合ふた事です、我々も人の過失に對しては斯の如き寛大の心がなければならぬものです、

(二)愛は人の益を圖るなり

愛は人をかはいらしく思ふのみではない、人の幸福を計る事です、そして其幸福を計る所以は、其人より報酬を求むる心があつての事ではない、自分の利を思はずに單に他人の爲に幸福を計るの心です、勿論人を愛せば其結果は自分の益にもなるが、其利益を計算した上でする事ではない、全く献身的にする事です、親は子より報酬を望んで世話するのではない、神は人に愛されたいとて人を愛するのではない、全く利欲を離れたる愛です、嘗て某の醫者があつて攝津國麻田に住で居つた、この人は仁心の深いひとで貧人の病むを聞ては、遠近に拘はらず自ら行て頁藥を與へ、治するに及んでも更に酬謝を受けず病後自活の出來ぬものには米を與へ、又は資本を與へて糊口の道を授けなどして慈善の行を致した、一日領主病に依て診斷を致した、其節に衣服は塵垢に汚れて居る、から、領主は紋服を與へなされた、然るに歸路老年の乞食が路傍に病の爲め苦んで居るを見て可愛想でたまらぬから藥を與へ、其衣では寒からうと云ふて拜領の紋服を與へて自愛せよと云つて去つたと云ふ事がある、是は自分の利を求めずに人の益を計つたものです、眞の愛は無慾なものです、献身的のものです、

(三)愛は眞理を喜ぶ

此に眞理とは科學上の眞理と云ふ事ではなく、正義公道を指したものです、正義公道をば何故に愛は喜ぶかと云ふに、正義公道でなければ人は安全を來たす事が出來ぬからです、世人は幸福や安全を計るには、其近道として不正直や欺騙などを撰んで後に及んで大に悔ゆるものです、眞正の安寧幸福は正則を踏まなければ得られぬもので、變則を踏で一時は其目的を達したやうに見ゆる事もあるが、それは一時の事で必ず終には破れて失望に終はるものです、故に自分の安全でも、他人の安全でも、必ず正義公道に依らねばならぬ、人を愛するのは他人に一時の安寧を得せしむるのではない、永く其幸福を得るやうに計るのです、故に人をして正義公道を行はしむ、自分の愛する人だからと云ふて其不義をも諫めず、之を其儘に放任するのは愛ではない、愛は不義を喜ばずして眞理を喜ぶ、それ故に愛の深き人は他人の不義を見て之を諫めま

す、何ぜなれば愛は人の幸福を計るからです、不義は人を不幸ならしめ、眞理は人を幸福ならしむるものです、昔梁の君獵に出まして、白き雁の群を見て、車より下て之を射んとしたが道を通る人があるから邪魔だと思ひ、止れと命じたれども止まらぬ、そこで白雁は駭きて飛び去つた、梁君大に怒て其人を射んとしたれば、臣の公孫龍と云ふ人が車より下て、君の射るのを止めました、君は怒て申すには汝は君に與せずして他人に與するとは何事ぞと、公孫龍答て曰ふには、昔齊の景公の時に雨降ざると三年、卜するものゝ曰ふには、人を犧牲として祈らば雨降ると、景公堂を下り頓首して申すには、吾が雨を求むるは吾民の爲であれば、人を犧牲にするには忍びぬ、吾は之に代つて犧牲となると、言の終らぬ中に雨が降りました、是は天に德あつて民を惠むのです、然るに今君は白雁の爲に人を射殺さんとするは虎や狼のやうな所業でありますと、そこ

で梁君は感じて其手を取て車に上せ、歸て申すには今日は幸である、他人の獵は禽獸を得るが、吾が獵は善言を得て歸ると、實に公孫襲は君を愛するから、君の不義には與せぬ、愛は眞理を喜ぶものです、君の幸福を計るものは其諫でありつた、若し正義公道を喜ぶの心がなくば、諫むる事が出來ぬ、かれが愛を以て不義を諫めたから、君をして過なからしめたのです、實に是れ眞正の愛と云ふべきものです、

(四)愛は何事も包容む

包容とは告發の反對にして、他人の過失や罪惡を告發せぬ事を申すのです、勿論國法を犯すとか、又は教會に對して大罪を犯す時には、公衆の爲に必ず告發せざるべからざる事がありまして、衆人を愛するが爲に告發するの必要がありますが、此では其事を云ふのではない、別に社會に關した大罪を包容むと云ふのではない、告發すべき罪惡ではなく、何

も他人に關した罪惡でもなく、其人一個だけの過失を申すのです、世間には自分が法廷に出づる證人でもない癖に、他の過失や罪惡を世間に公言するを悅ぶの癖ある人がありまして、公言すべき義務があるのではないが、談話の材料として他人の非を語るものがある、姑の寺參に嫁の惡口を云ふの類です、是れ實に愛の道に反く事です、父は子の爲に隱くし、子は父の爲に隱くす」と云ふ事が父子の愛情です、人は自分の名譽を害せぬやうにすべきものですが、他人の名譽をも害せぬやうにする義務があるものです、他人の名譽の高きを妬んで之を非難するは愛の道に合はぬ、たとへ他人には色々の欠點があつても、徒らに之を公言すべきものではない、何ぜなれば其公言したる爲に、其名譽は落ちます、これ其人の大なる不幸と云ふべきものです、人を愛するものは他人の幸福を計るものです、名譽は幸福の一である、名譽は人の權理の一です、愛は

可成其人の欠點のあるのをも知れぬやうに包容むのです、

(五)愛は何事も信ず

人を信ずる事も亦人を愛する事より生ずるものにて、我が愛せぬ人の言や行を疑ふも、己れの愛する人の言や行を信ずるものです、たとへ外部より見ては如何にも立派に見えても、自分の愛せざる人ならば、色々と邪推をなして、善心より出でたのではなからうと思ひます、之に反して自分の愛する人の爲す事は、少しも疑ふと云ふ事がない、愛は信ずるものです、親は小兒の云ふ事をば何でも信ずるやうな傾向のあるのは何人もよく知つて居る所です、是れには隨分弊害があつて親は小兒に欺かれて不都合なる事を致す場合がありますが、其小兒の言ふことを信ずるのは、矢張小兒を愛するより生ずるので、自然の結果です、今此に二人の相爭ふものがあつて、各自分の正なるを主張するの場合に、之を

審判する人があつて一方が自分の愛する人ならば、そして判然と正邪を區別するの確證のない場合には、其愛する人の言を信ずるは自然です、是は惡い事ではない、若し其愛さるゝ人の方は不正の證據のあるにも拘はらず、正と信じ、他の人は正なる證據のあるにも拘はらず、之を邪と信ずるは愛の道に合はぬ事は勿論ですが、兩方共に曖昧の時には愛さるゝ人が信ぜらるゝは勢の然らしむる所で、如何とも仕方のない事です、何ぜなれば人の心はそのやうに出來て居るもので、別に疑ふべき理由のない時には、其愛する人を信ずるやうに生れたものだからです、

(六)愛は何事も望む

愛は望むとは一説によれば、愛は其愛する人の爲めに幸福を希望することゝ説きますが、是は適當な解釋ではないやうです、勿論愛は人の爲に幸福を望むは極つて居る事です、他の説には望むとは輕しく人を見

捨ぬ事を云ふのです、即ち人に就て輕しく失望せぬ事です、之を例にて云はゞ、此に自分の愛する人があつて何か罪を犯したと致します、其人を悔改せしめて正道に立歸へらしめやうとするは、愛する人の精神です、然るに色々と手を下して導ひても容易に悔改せぬ、けれども容易に失望せぬ、自分が之を愛するの心が深き爲に、手離をせずに色々と工夫をなし、何處までも之を導くものです、即ち悔改に至るまで希望を以て導くのです、之を指して愛は望むと云ふのです、親は子の惡い事を見ても之を悔改せしめやうとして止む事がない、他人より見れば最早や手を下すも希望のないやうに見えても、たとへ他人は之を徒勞と見ても、實際の親に取つては悔改を望むものです、即ち容易に失望せずに骨を折つて導くものです、他人ならば既に失望したのに、親が未だ失望せぬとは、是は全く愛のある結果です、教會の牧士となつて居る人でも、會友

を愛するの心深きと淺きとに由て、其勤むる所には大なる差があります、たとへば不品行の會友があつて之を悔改せしめやうと思ふても、中々悔改の樣子の見へぬ時には、あの人は迚ても駄目です、何程導ひても益がないから、除名した方がよからうとて、遂に教會から除名するが、其人を愛する心の深き牧士ならば、何とかして悔改せしめやうとする希望をなくさないものです、百方術を盡くしても尙之を悔改せしめやうと思ひ、他の牧士ならば五度訪問する所を十度も訪問して懇々と說諭を加ふるものです、そして遂に成功する、是は愛の働です、愛は希望と變ずるのです、

（七）愛は何事も忍ぶ

忍ぶとは此では自分の爲に忍ぶのではなく、他人の爲に忍ぶのです、人を愛する時には、其人の爲には如何なる艱難があつても、之を厭ふこと

なく忍ぶが常です、そして愛の度の深きが爲に殆んと困難を感ぜずにする事がある、親が子の病氣の爲には、秋夜の長きをも苦いとは思はず、己れを忘れて看護するは人の能く知る所です、臣は君の爲に忍び、友は友の爲に忍び、夫は妻の爲に忍び、妻は夫の爲に忍ぶ、是等は一片の義務心より生ずるのではなく、愛情より生ずるのです、釋忍性と云ふ僧があつて、癩病人を助けた話がある、それは大和國の人ですが、さる比奈良坂に癩病人があつて、手も足もゆかみ、乞食をする事も出來ぬ程に憐むべきやうになつて、數日間食物を食ふことが出來ずにありました、その時に忍性は西大寺にあつて之を憐み、夜も曉に及ぶ頃その坂の宅に至り、其癩病人を負ふてつれ來り、夕になれば又其宅に負ふて歸へし、風雨寒暑に拘はらず、數年間之を行ひ續けたと云ふ事です、是は可愛想と云ふ情からしてこの忍耐が起つたのです、今日基督教宣教師は異邦に渡り、

氣候の爲に苦しめられ、野蠻人の暴行に逢ひ、千萬無量の苦痛を受くるも、能く死を決して傳道するのは、全く其土地の人民を愛するの情からです、愛があれば忍ばれぬ事がない、水火でも辭せぬものです、孟宗は寒中筍を取つた事を人のよく記憶する所であるが、是も母を愛するの心があるから、寒氣の苦みは容易に忍ばれたのです、基督の忍耐は信者のよく知る所です、至尊の位にありながら、頭を枕する所もなく、甚しきは人に侮辱され十字架を負ふに至りました、けれども彼は人を愛するの心深きが爲に、之を忍ぶ事が出來たのです、愛は忍ぶものです、佐倉總吾は村民の幸福を計る爲に十字架を忍びました、忍耐は愛の變態であつて、水の氷と變じたやうなものです、我々は人間を愛するの心が深きを加ふれば、何程でも艱難を忍で洪福を計るの事業に從事する事が出來ます實に羨ふべきは愛情です、

第五章　愛の作用

「おほよそ愛あるものは神に由て生れ且神を識るなり」

（約一書四章七）

「愛の中に懼あることなし」

（約一書四章十八）

「愛は德を建るものなり」

（哥林前八章一）

是迄愛の性質の如何なるものにて、其境遇に應してどんな德に變化するかを大畧申上げたゆゑに、是より愛の作用につきて申上げやうと存じます、其作用を大別すれば愛は智力の作用をすること、安心立命の基たること、及び他人を感化するの力たる事です、其順序に從て説明致しませう、

(一)　愛は智力なり

愛は智力なりと云へば、一寸甚だ理に背くやうに思はるゝなれども、愛は智力なりとの事は事實に由て證明せらるゝ事です、愛は心理學上より論ずれば、情の部に屬するものであるが、宗教上より論ずれば情に屬するは勿論の事なれども、智力として働くの例がある事は明かです、聖書には「愛なきものは神を識らず」とあれば、愛は神を知るの力である事が知れます、神を知るには神學と云ふものを學んだり、又は天地萬有の理を學んだりして多くの智識を得ますが、それでは迚ても及ばぬ深き道理あつて、それは愛でなければ知れません、即ち神を愛するに由て次第に知れるのです、之に同じ道理は世間にもあります、夫れは人間の趣味力と云ふものです、國々に由て異なるものですから、西洋の人は東洋に來つて東洋人の美妙とする書畫を見ても、始めは美と云ふ感覺が起らぬ、殊に今まで油畫のやうなものばかりを見て樂んで居た人が、急に

文人畫のやうなものを見ても、丸で小兒のいたづらでもして墨を付けたものと思ふ外ありません、さかしながら數々之を見れば稍畫のやうに見ゆる、更に數々見れば幾分か風味が付く、遂には一種無類の風味があつて云ふべからざる快樂を感ずるものです、即ち之を味ふて其美なるを知るのです、然るに始め之を見ると直ちに理窟で考へても知れるものではない、愛するに由ていよ〳〵その愛すべきを知るのです、神を知るにも理窟で始から知らんとしても、中々愛するやうにはならぬものです、神を愛すれば其愛すべき性質が知れるのです、然らば或人は申しませう、愛して後神を知るならば、知らぬ前にはどうして愛する乎と、それは尤の事ですが、始めに神を愛するのは少しでも知つた丈けを愛するので、愛する時は其知る範圍は廣くなる、更に其廣くなつた丈けの範圍で愛すれば、其範圍は次第に廣くなります、後には充分に神を知る

事の出來るやうになるのです、人が交際すれば次第に相知るやうになる、其愛情の厚くなるに從て互に知る事も深くなるのです、之と少しく異なりますが、神を愛するは神を識るの方法だと云ふ事は、神の心と人の心と相似ると云ふ點にあるのです、英雄でなければ英雄が知れぬとは、双方共に同じ心があるからです、西郷が勝を知り、勝が西郷を知つたから徳川家や江戸の人民が滅亡を免れたのです、親の情は子が知らぬ、「子を以て知る親の恩」と云ふ事はこの道理を示したものです、同病相憐むは心を一にするからです、即ち同じ感覺を持つからです、神を愛すれば神が知れる、知れるに從て自分の心も次第に神を摸範とするに依て、神の心に似て來る、似たる度の進むに從て愛するやうになる、知る事と愛する事とは正比例で進むものです、愛せざるは知らぬ爲め、知らぬは愛せざる爲です、何ぜ植物學者が草木を愛するやうに人は之を愛さぬ

か、之を知らぬからです、何ぜ動物學者のやうに人は虫を愛さぬか、之を知らぬからです、子供は何ぜ親不孝するか、親を知らぬからです、何ぜ人は人と相ひ爭ふか、互に知らぬからです、何ぜ知らぬかと云へば、其交際親密でないからです、人の神を愛さぬは知らぬ爲です、知らぬも愛さぬ爲です、我々は愛に進む時は、知識に進むのです、聖書の知識神學上の知識は必要ですが、宗教の奥義と云ふものはそんなものではない、心と心の交際です、神我に居り、我神に居ると云ふ經驗です、神に居るものは神に似たるもの、神に似たるものは神を愛するもの、神を愛するものは神を知れるものです、自分のあり丈けの力で神を愛するならば、啻に全く神を愛するのみならず、全く神を知つた人です、即ち實驗上より神を全く知たのです、

(二)愛は安心立命の基

聖書に「全き愛は懼を除く」とあり、又「愛の中には懼れあることなし」とも記してありまして、是は安心立命の秘訣を示す教であります、凡て人の不安心と云ふものは如何なる元因から來るかと尋ぬるに、己が不正不義より來るのです、一言で申さば自分の罪惡より來るのです、そして罪惡と申すものには色々の形躰がありますが、皆愛の道に背く事です、愛に背かぬ罪はない、愛の道を盡せばすべての罪を免るゝものです、故に愛が全ければ懼るゝ所がない、心に懼るゝ所がなくば、天を仰ても地に伏しても、憚る所がないのです、是れは眞正の安心立命と申すのです、今この道理を一層明白ならしむる爲に、完全の愛とは如何なるもの乎を述べませう、一概に愛と申しても其中には程度がある、云はゝ深きもあり淺きもある、純粹なるものもあり、混合したるものもある、故に安心立命は其基となるべき愛の純粹なると否とに依り、又深きと淺きとに依り

て、差異を來たすは當然の事です、故に私は此に其愛の性質を述べます、愛の淺深は云ふまでもなく知れて居る事ですから別に申す必要はないが、純粋とは如何なる事かを申さねばならぬ、純粋の愛とは混合物のなき愛と云ふ事です、例へば純金と云ふが如きです、今愛と云ふものに混合して居るものを見るに、色々の物があります、人を愛すると云ふても、其愛する精神には樣々ある、純粋の愛が至て少ないものです、愛の中には利慾心の混合する場合がある、例へば人を愛すれば己れの利になる、彼は我に必ず報酬するだらう、何時か我が爲に利になる事があらうと思ふが如き事です、是は利の混合したる愛で丸で悪いと云ふ事ではないが、純粋の愛とは申されぬ、何ぜなれば利の目的がなければ愛さぬからです、こんな愛は富者に對しては起るも、貧者に對しては起らぬからです、愛には相違ないが最も高尚なる愛ではない、又名譽が愛と混合

して居る場合もある、貧者を惠めば社會に我が名は慈善家として知れると思ふが如き事です、是も愛であるが純粋ではない、もし人が見ないならば愛さぬものです、こんな愛では陰德が出來ぬものです、凡て愛は方法となつて他に目的があれば純粋の愛とは云はれぬ、純粋は之を分析しても愛のです、利を離れたる愛です、單に人の爲に人を愛するの愛です、献身的の愛です、斯の如きの愛は場合の如何に依らず、自分の損益を顧みず、他人の幸福を求むるの心です、實に水晶の如く透明なるものです、この愛があれば自然に其行ふ所が道に合ひ、正義公道が盡されて居る、神に對しては其敬を盡くし、人に對しては其愛を盡くし、心に顧みても恥づる所がない、恐るゝ所がない、然らば何物も其心を亂だすものがない、實に清らかなる水のやうです、こんな心から眞正の勇氣が起る、安心も起る、この心を以て天地を見れば何物も我心を慰めぬものなく、

鳥も我が爲に歌ひ、花も我が爲に笑ふて居るやうな心地がする、この心があれば行く所皆天國です、火の中でも水の中でも極樂です、心配の種子がない、故に全き愛は懼を除くのです、「君子には終身の樂があつて一日の憂がない」とはこの事を申すのです

(三)愛は感化力なり

「愛は德を建つるものなり」と聖書に云へる如く、愛は他人の德の進歩を計るものです、其德を建つるにも色々の方法がありまして、故意に出づる事と、自然に出づる事とあります、故意に出づる事とは、預め一の目的を定めて働く事にして、例へば他人を愛するの心よりして、其人の德を建つるやうに方法を盡くして働く事です、人を說諭する事や、又は敎育する事は皆其類でありまして、元より德を建つるの目的を定めて働くのです、去かし私は此に自然に出る働を述べたいと思ふのです、元より

定まつた目的なくして自然に即ち無意識的に人の德を立つる事です、之を愛の感化力と申すのです、即ち愛に感じて自然の人が德に進むのです、是は實に愛の大なる力と云ふべきものです、人の心と云ふものは妙なもので、隨分強いやうではあるが、又時としては甚だ脆きものです、剛愎なる人は百方術を盡くして之を矯正しやうとしても、頑として動かぬものですが、之を他の方面より打てば案外に脆いものです、即ち愛に對しては人は脆いものです、故に愛に向へば強く反對が出來ぬ、仁者には敵がないとは之が爲です、この脆い所は人間の善い所です、又愛は力のあるもので他の方法では矯正の望の絕へたる事でも愛は容易に之を矯正するの力があります、荒井嘉右衛門と申すは仙臺藩の獄官でありましたが、時に栗原郡に艱難辛苦を經て家產を蓄へたる農夫があつた、其病氣して死するに臨て二人の子供を召して申すには、吾は汝等

の爲に産業の基を立てたりと思ふ、吾が死んだ後に家産を二つに分けて半分つゝ取れ、決して爭ふてはならぬと、其後兄弟は親睦して家業を勵んで居つたが、一日弟が兄に申すには、父の遺命の如く二分せんと、兄が申すには暫時待て靜かに謀らうではないかと、弟はなか〳〵聽かぬ、遂に二人が爭ふて訴ふる事となりました荒井嘉右衛門二人を召し、一つの室に入れて起臥せしめ、食物も一團の握り飯を與へて二人に半分つゝ、食はせ一月も過ぎても訴を問ふ樣子が見へぬ、二人は嘉右衛門の家に居て、其家族の樣子を見れば全家皆親睦して長幼の禮亂るゝ事がなく、實に和氣藹然として見ゆる、そこで、二人が自分を顧みて耻さ胸に滿ち堪へられぬやうになり、互に手を執て號泣し是までの怒を皆消して深く前非を悔ひ、爭を止め親睦を結で歸宅したと云ふ事です、是は嘉右衛門一家の内に愛情の滿ちあふれて居る事を見て自然に感化された

のです、聖書には基督の愛に依て感化されたる盜賊の事が記してあります、基督が十字架に釘られし時に、二人の盜賊も其左右につけられた事が記して居る、そして始めには二人の盜賊も人民と共に基督を謗りたるものですが、後には丸で反對の人となりました、なぜと云ふに一方の盜賊が尙基督を謗りて居るが、他方の盜賊は之を責め申すには「爾おなじく罪を受けながら神を畏れざる乎我儕は當然なり行ことの報を受くるなれども、此人は(基督を指す)何も不是事は行ざりし也」と、そして更に基督に向て申すには「爾その國に至らん時我を憶ひたまへ」と、基督は之に答へて申すには「誠に我なんぢに告げん今日なんぢは我と偕に樂園に在るべし」と、この盜賊の變化は實に驚くべきものです、何ぜなれば暫時以前には怖るべき惡人であつたが、今は眞に悔改して天國に入る程の善人となつたからです、この大なる感化は何より來たかと云ふ

に、別に福音を十字架上で聞た事でもない、聖書を讀んだ爲でもない、唯基督の愛に感じたのです、基督は十字架に上げられ、其の敵は口を極めて基督を讒謗し、通常の人ならば定めて敵を怨むべきの場合なれども、基督は少しも怨むる色なく、唯天に向て「父よ彼等を救し給へ」と祈りました、盜賊はこの祈を聽て不審に思ふた、敵を怨むべきの處なるに、この人は反て敵の爲に祈つたとは妙な事だ、この人は大なる慈悲の心を持つて居る人だ、この人は吾々のやうに罪があつて刑に處されたのではない、この人は敵に悪まれたのであつて、罪人ではあるまい、こんな愛に富む人は今まで見た事がない、この人は必ず其言ふ如く神の子である、實に今は好機會である、吾は悔改してこの人に依頼せん、他人が何んとこの人を謗つても、吾はこの人を神の子と信ずると遂に斷然基督に祈をなしたのです、愛の力は大なるものです、これは愛の感化力です、幾萬

の人民が基督に服從して其誠を遵奉するに至つたのは、其愛に感化されたのです、パウロは傳道の爲に口にも筆にも述べ盡くされぬ程の苦を忍びましたが、其忍耐力となつたのは基督の愛を感じた事です、彼は「基督の愛我を勵ませり」と申しました、愛は基督教の機關を運轉せしむる蒸氣力です、基督教は愛の宗教です、其宗教の起原は神の愛です、其贖罪も基督の愛に依り、信者の悔改や信仰も神と基督の愛に感ずるより起り、信者の信德の互に進歩するも相愛するに依るものです、故に愛を知れば基督教を知るのです、愛の外に基督教がない、愛は基督教の心髄です、

基督教の心髄　終

明治廿九年五月廿[illegible]日印刷
仝　年五月廿[illegible]日發行

著者　東京府南豐島郡澁谷村一番地青山學院內
　　山田寅之助

發行者　東京市京橋區銀座四丁目二番地寄留
　　清水俊藏

印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
　　高田乙三

發行所　東京市京橋區銀座四丁目二番地
　　教文館

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
　　株式會社秀英舍

教文館發行書籍略目

組織神學　レイモンド著　山田寅之助譯　第一、第二、第三、各六十五錢　合本一圓八十錢　郵稅十錢

基督教神學　ロウレイ著　山田寅之助譯　定價五十錢　郵稅八錢

基督信徒之經驗　山田寅之助撰　定價四十錢　郵稅四錢

教會條例釋義　山田寅之助譯　定價廿五錢　郵稅四錢

美以教會信條義解　山田寅之助著　定價十五錢　郵稅四錢

嘉言類聚　山田寅之助著　定價二十六錢　郵稅四錢

日本及基督教　山田寅之助著　定價五錢　郵稅二錢

神之自啓　博士ハリス著　小林彦五郎譯　定價一圓二十錢　四百匁の小包郵稅申受候

基督教信仰之根據　博士ピート著　和泉彌六譯　定價十錢　郵稅四錢

ムーデー氏やぐり　クッドマン　鮫內敬之助譯　定價十八錢　郵稅四錢

小瀉山人譯 コツプ物語 郵定税價二錢

アンブラー著 基督教大眞理 郵定税價二錢

小林光茂著 基督教一班 郵定税價四錢

小林光茂編 眞理の叢門 郵定税價四十五錢

木村七十郎著 耶蘇教入一班 郵定税價二錢

木村七十郎著 聖教倫理一班 郵定税價二五錢

安藤太郎演述 在布哇受洗始末 郵定税價二錢

基督教倫理叢書第一卷 祈禱 郵定税價二四錢

基督教倫理叢書、號外 祈禱之垂訓 郵定税價二二錢五厘

基督教倫理叢書第二卷 基督教と小供 郵定税價二四錢

基督教倫理叢書第三卷 基督教と家庭 近刊 郵定税價二四錢

特18
971

基督教の心髄

国立国会図書館

020498-000-7

特18-971

基督教の心髄

山田　寅之助／著

M29

ABI-0309